

史料紹介・上杉憲実文書集（1）

——山内上杉氏文書集 6 ——

黒田基樹

はしがき

本文書集は、「山内上杉氏文書集」6として、前回・前々回で取り上げた上杉憲忠・房頭の父にあたる上杉憲実の発給文書・受給文書を集成し、編年順に配列したものである。ただし憲実の関係文書は多数にのぼるため、二回に分けて掲載するものとする。今回においては、応永年間（1394～1428）までの、憲実の発給文書二〇点、受給文書一〇点、計三〇点を集成し、その他、家臣の奉書・副状など三八点を参考文書としてあわせて収録した。

収録にあたっては、文書ごとに通番を付し、文書形式によって示した。また出典史料名については一般的な史料名を採用した。翻刻形式についても、一般的な史料集に準じるかたちをとり、注記については人名・年代など、必要最小限のものにとどめた。

なお一部の文書については、写真版による確認をとれていないものがある。今後それらの確認作業をすすめていく必要があるが、ここでは現時点での作業成果としてまとめておくことにしたい。これによって、室町期の関東上杉氏研究の進展に、多少とも寄与することができれば幸いである。

参考 1 兵衛尉某・越前守某連署奉書（相承院文書）

佐介谷稻荷社別当職并当社領等事、任先照寺殿御補任之旨、如元可為御計之由候也、仍執達如件、

応永廿五年二月十日 兵衛尉（花押）

越前守（花押）

相承院法印御房

参考 2 兵衛尉某・島田泰規連署奉書（明王院文書）

遍照院雜掌印乘申，上野国浄法寺内平塚・牛田・岩井三ヶ所事，数通文書明白之上，当知行無相違之处，長谷河山城守押妨云々，太不可然，所詮不日退彼違乱，可被沙汰付下地於印乘之由候也，仍執達如件，

応永廿五年三月卅日 兵衛尉（花押）

(島田泰規)
治部丞（花押）

（宛所欠）

参考3 兵衛尉某・加賀守某連署奉書（蜷川親治氏所蔵文書）

上野国高山御厨中村郷内田畠・在家〈小林修理亮／号香津海跡〉事，致寄進同郷内宝光寺訖，然而未御判之間，先以連署可令寄附之由候也，仍執達如件，

応永廿五年四月十三日 兵衛尉（花押）

加賀守（花押）

（宛所欠）

参考4 兵衛尉某・左衛門尉定忠連署奉書（三島神社文書）

伊豆国三島社領長崎郷事，如元被返付社家訖，雖然已前為沽却地之間，自当年於三ヶ年土貢者，被寄当社御修理方，可被遂勘定之由候也，仍執達如件，

応永廿五年八月三日 兵衛尉（花押）

(定忠)
左衛門尉（花押）

三島宮東大夫殿

参考5 兵衛尉某・左衛門尉定忠連署奉書（三島神社文書）

伊豆国長崎郷事，為同国三島社領之段，治承四年十月廿一日右大将家御寄進状，建武二年十二月十一日長寿寺殿御判等明鏡之上者，不日退瀬下掃部助知行，可被沙汰付下地於当社東大夫之由候也，仍執達如件，

応永廿五年八月三日 兵衛尉（花押）

(定忠)
左衛門尉（花押）

(道守)
大石遠江入道殿

参考6 大石道守打渡状（三島神社文書）

伊豆国長崎郷事，任今月三日御奉書之旨，退瀬下掃部助知行，所沙汰付下地於当社東大夫之也，仍渡状如件，

応永廿五年八月廿七日 ^(大石)道守(花押)
三島宮東大夫殿

1 上杉憲実奉書（白川文書）

連々御忠節伺申候，神妙之至候，於向後弥憑被思食処也，追賞可被行之状，依仰執達如件，

応永廿六年二月一日 憲実（花押1）
^(満政)小峯参河守殿

参考7 島田泰規・左衛門尉定忠連署奉書写（東福寺文書）

東福寺雑掌有本申，武蔵国多西郡船木田庄領家職年貢之事，多年知行無相違之處，爰当国諸公事五ヶ年間，号御免，平山参河入道彼年貢銭対捍云々，太以不可然，所詮不可被准自余公事上者，止平山違乱，可被全寺務之由候也，仍執達如件，

応永廿六年三月六日 ^(島田泰規)治部丞有判
^(定忠)左衛門丞有判
^(忠政)長尾々張入道殿

参考8 左衛門尉定忠書状写（烟田文書）

徳宿肥前守跡事，一色方口捍領御当知行之処，肥前守立還押領之由承候，隨而被下御代官候，面々様号一揆同心可被支申之由，其聞候，事實候者，不可然候，仍於彼所当方御内人々不可有合力之由，被下御奉書候，其段可有御心得候，恐々謹言，

^(年未詳)六月廿四日 左衛門尉定忠（花押）
謹上 ^(幹胤)烟田遠江守殿

*前号の左衛門尉定忠に懸けてここに収録する。

2 足利義持袖判下文（上杉文書）

^(足利義持)（花押）
伊豆・上野両国守護職事，所補任上杉四郎憲実也，早守先例，可致沙汰之状如件，
応永廿六年八月廿八日

参考9 長尾憲明遵行状（雲頂庵文書）

円覚寺大義庵雑掌申，当庵領上州園田御厨東村上村事，文書明白上者，莅彼所，如

元可沙汰付下地於彼雜掌候者也，

応永廿七年四月十六日 ^(長尾) 憲明 (花押)

当所催促所

3 細川満元奉書案 (鹿王院文書)

天竜寺領相模国成田庄・武蔵国下里郷段錢以下諸公事并臨時課役・守護役等事，早任一

応永廿七年四月十九日 ^(細川満元) 沙弥 判

上杉四郎殿

参考10 長尾憲明遵行状写 (相州文書)

建長寺宝珠庵雜掌申，上野国奈久留見村参分式方内滝安名事，任去月廿六日御奉書之旨，退発智伊豆守違乱，可令全寺家所務之由候也，仍執達如件，

応永廿七年六月八日 ^(長尾) 憲明 (花押)

神谷掃部助殿

瀬下隼人佑殿

4 細川満元奉書案 (佐々木文書)

佐々木吉童子知行分武蔵国太田渋子領家職事，年来知行無相違處，葛山六郎左衛門尉定藤混地頭職及違乱云々，甚不可然，所詮不日退定藤，任多年知行之旨，可被全吉童子代所務，更不可有遲怠之由，所被仰下也，仍執達如件，

応永廿七年七月二日 ^(細川満元) 沙弥 判

上杉四郎殿 ^(裏書) 「在御判」

参考11 左近将監実次・長尾芳伝連署奉書 (三島神社文書)

三嶋宮東西御読経所并三昧堂・塔本八幡宮・国分寺供僧等申，内外宮役夫工米事，於当社領者，雖被勘落之，至于供僧領者，任往古例所被免除也，早守去十日御教書之旨，向後不可有相違之由候也，仍執達如件，

応永廿九年五月廿二日 ^(実次) 左近将監 (花押)

^(長尾忠政) 沙弥 (花押)

^(憲清) 寺尾伊豆守殿

参考12 左衛門尉定忠書下(中山法華経寺文書)

中山本妙寺雑掌申、下総国葛西御厨篠崎郷内当寺領田畠在家事、任去四年十二月廿三日安堵御判之旨、不可有相違之状如件、

応永廿九年七月七日 左衛門尉定忠(花押)

本妙寺別当兵部卿権大僧都

参考13 長尾芳伝書下(金沢文庫文書)

金沢称名寺造當用脚勸進関事

右、於六浦庄内常福寺門前、人別二文・駄別三文充、充取之、可被修其功之状、如件、

応永廿九年七月十七日 沙弥^(長尾忠政)(花押)

参考14 寺尾憲清書状(三島神社文書)

当社御池はらはれ候へく候、仍人夫事者、已前申付へきよし被下御書下候、狩野庄内又田方しかるへき所お、道舟と談合候て、折紙お可被成候、謹言、

^(応永二十九年)
後十月四日

^(寺尾)
憲清(花押)

さんみ房

5 足利持氏御教書(清河寺文書)

武蔵国足立郡上内野郷内田壺町貳段・在家壺字并敷地共(長井駿河三郎実基寄進)、同郷内田壺町貳段・佐地川在家壺字(駿河三郎実基伯父紹旭蔵主寄進之地等)事、早守寄附之旨、可沙汰付下地於清河寺雑掌之由、可被下知代官之状如件、

応永廿九年十一月廿一日 ^(足利持氏)(花押)

安房四郎殿

6 足利持氏御教書(安保文書)

安保信濃守宗繁申、武蔵国秩父郡長田郷半分事、背遵行旨、浄妙寺雑掌支之云々、其無謂、所詮重臨彼所、可沙汰付下地於宗繁之由、可被下知代官之状、如件、

応永廿九年十一月廿六日 ^(足利持氏)(花押)

安房四郎殿

参考15 左近将監実次・長尾芳伝連署奉書（円覚寺文書）

円覚寺造営要脚伊豆国府中関所事、爰於自余関々者、雖被破却之、至于彼関所者、以前任御教書等之旨、如元所被関之也、然者御事書遣之、所詮守彼旨、可致沙汰之旨、可被相触関預人之由候也、仍執達如件、

応永卅年五月十八日 ^(実次) 左近将監（花押）
^(長尾忠政) 沙弥（花押）

^(憲清)
寺尾伊豆守殿

参考16 左近将監実次書状（相承院文書）

先日就西村事、可進状之由、被仰出候間、申候之处、御状給候間、委細令披露候間、慈悲寺事者兼日御望所と申、西村ニハ莫大過上之地ニ候由、其聞候之間、兩方可然之由、御落居候之处、如此御状之間、未道行候、先日御状ニ如此候へ共、上之御意候上者、是非を雖申之由候、雖然御心底を不被残御申候者、其段可令披露候歟、若御ためもしひ寺まさるへきかと存候、是ハ内々為御心得令申候、委細御返事に示給候者、其段可存候、每時期後信候、恐々敬白、

^(年未詳)
正月廿五日 左近将監実次（花押）

謹上 相承院

御同宿

*前号の左近将監実次に懸けてここに収録する。

参考17 鳥名木国義軍忠状（鳥名木文書）

著到

行方鳥名木右馬助国義申軍忠事、

右、就小栗常陸孫次郎御対治事、去六月廿六日馳参古河御陣之处、同七月一日小栗御進発之間、令供奉、致日々矢戦、同八月二日城責時、属土岐美作守手、^(憲秀)打破南面壁、最前切入、致散々合戦、責落、剩被疵訖、同夜堀内城令没落上者、早下給御証判、為備向後亀鏡、恐々如件、

応永三十年八月 日

「承了、」

^(上杉憲実)
「管領為大將御発向之处、未能判形之間、任被仰下之旨、所封裏也、

応永卅年十一月廿八日 ^(明石) 行実（花押）
^(鳥田) 泰規（花押）

」

参考18 烟田幹胤軍忠状写（烟田文書）

（校正訖）
「同前」

着到

鹿島烟田遠江守幹胤軍忠事、

右、就小栗孫次郎（満重）年来館籠、陰謀露頭之間、御罷向之砌、六月廿日古河御陣馳參、同七月一日結城江御屋形御共申、同五日伊佐江御共申、同八日小栗江御迫候仁、致宿直警固、日々矢戦仕、同八月二日以御意、鹿嶋・行方・東条同心仁（憲幹）向真城致忠節候上、無程御敵没落仕候間、同八月五日結城江御帰参之間、御共申候上者、早下給御証判、為備後代龜鏡、恐々言上如件、

応永卅年八月 日

「承候了、」

（上杉憲実）
「管領為大將御発向之處、未能判形之間、任被仰下之旨、所封裏也、

応永卅年十一月廿八日 （明石） 行実在判
（島田） 泰規在判

」

参考19 長尾芳伝奉書（白田文書）

常陸国東条庄下条（市崎／郷） [] 参分□之事、為御料所々 （預） □ 置也、於有 （限） □ [] □、任先例可致執沙汰之由状、仍執達如件、

応永卅一年正月廿三日 （長尾忠政） 沙弥 （花押）

白田勘解 （左衛門尉殿力） []

7 足利持氏御教書（武家手鑑）

武蔵国久下郷内久下弥五郎入道跡并杣彦太郎跡屋敷等事、早守寄進状之旨、可沙汰付下地於金陸寺雜掌由、可被下知代官之状如件、

応永卅一年二月五日 （足利持氏） （花押）

安房四郎殿

参考20 足利持氏御教書（金沢文庫文書）

武蔵国六浦庄釜利屋郷白山堂事、任去建武二年六月十一日并貞和六年二月廿一日寄附之旨、為称名寺末寺、如元領掌不可有相違之状如件、

応永卅一年五月二日 （足利持氏） （花押）

8 上杉憲実施行状写(賜蘆文庫文書九)

^(筆裏書)
「白山寺」

武蔵国六浦庄釜利屋郷白山堂事、早任御判之旨、可沙汰付下地称名寺末寺白山堂雜掌之状、依仰執達如件、

応永卅一年五月二日 藤原(花押)

大石遠江入道殿

9 上杉憲実寄進状(神田孝平氏旧蔵文書)

寄進 鶴岡八幡宮社

上野国岡本郷内・下総国幸島庄弓田郷内田畠・在家等事、
右、為上州長野郷内東荒浪村替、所奉寄附之状如件、

応永卅一年五月晦日 藤原朝臣(花押2)

参考21 足利持氏充行状(上杉文書)

青砥四郎左衛門入道跡除堀内分事、為御料所御知行あるへく候、あなかしく、

応永卅一年六月二日 ^(足利)持氏(花押)

女房達中

申させ給へ

10 上杉憲実施行状(上杉文書)

武蔵国青砥四郎左衛門入道跡除堀内分事、早守御判之旨、可沙汰付下地於大御所御代官之状、依仰執達如件、

応永卅一年六月二日 藤原(花押2)

^(道守)
大石遠江入道殿

11 上杉憲実書状写(白河証古文書)

依上保御判御拝領、目出候、仍馬一匹(鹿毛・糟/毛・雲雀)給候、令悦喜候、他事期後信候、恐々謹言、

^(応永三十一年力)
六月二日 藤原憲実(花押2)

^(氏朝)
謹上 白河弾正少弼殿

参考22 足利持氏御教書（白川文書）

陸奥国依上保内依上^(宗義)三郎庶子分事，所充行也者，早守先例可致沙汰之状如件，
応永卅一年六月十三日 ^(足利持氏)（花押）
^(氏朝)白河弾正少弼殿

12 上杉憲実施行状（白川文書）

陸奥国依上保内依上庶子分事，早守御下文之旨，笠間長門守相共莅彼所々，可被沙
汰付下地於白河^(氏朝)弾正少弼状，依仰執達如件，
応永卅一年六月十三日 藤原（花押2）
小田出羽守殿

13 上杉憲実施行状（白川文書）

^(懸紙上書)
「笠間長門守殿 藤原憲実」
陸奥国依上保内依上庶子分事，早守御下文之旨，小田出羽守相共莅彼所々，可被沙
汰付下地於白河^(氏朝)弾正少弼之状，依仰執達如件，
応永卅一年六月十三日 藤原（花押2）
笠間長門守殿

参考23 足利持氏充行状（上杉文書）

^(端裏押書)
「 応永卅一 六 十七
むさしのくにしなかの御もんしよ
三つう」
品河太郎跡除堀内分事，為御料所御知行あるへく候，あなかしく，
応永卅一年六月十七日 ^(足利)持氏（花押）
女房達御中申させ給へ

14 上杉憲実施行状（上杉文書）

武蔵国品河太郎跡除堀内分事，早守御判之旨，可沙汰付下地^(足利持氏母一色氏)於大御所御代官之状，
依仰執達如件，
応永卅一年六月十七日 藤原（花押2）
^(道守)大石遠江入道殿

15 上杉憲実施行状（白川文書）

陸奥国依上保〈依上三郎跡^(宗義)〉事，早守去四月十一日御下文之旨，笠間長門守相共莅
彼所，可被沙汰付下地於白河彈正少弼^(兵朝)之状，依仰執達如件，

応永卅一年六月十九日 藤原（花押2）

小田出羽守殿

16 上杉憲実施行状（白川文書）

^(懸紙上書)
「笠間長門守殿 藤原憲実」

陸奥国依上保〈依上三郎跡^(宗義)〉事，早守去四月十一日御下文之旨，小田出羽守相共莅
彼所，可被沙汰付下地於白河彈正少弼^(兵朝)之状，依仰執達如件，

応永卅一年六月十九日 藤原（花押2）

笠間長門守殿

17 上杉憲実奉書（上杉文書）

^(足利持氏母一色氏)
大御所御代官申御料所武蔵国品河太郎跡除堀内分事，注進状其沙汰畢，爰品河太郎
率多勢，固支申云々，甚招重科歟，所詮重莅彼所，可被沙汰付下地於大御所御代官，
已於彼跡者，雖可被収公一円，以寬宥之儀，被殘堀内分之处，剩对御代官，任雅意
支申之条，難遁罪科，猶以及異儀者，為加治罰，云与力人，云交名人，載起請之詞，
不日可注進実否状，依仰執達如件，

応永卅一年七月五日 藤原（花押2）

大石遠江入道殿

参考24 足利持氏御教書案（鹿島神宮文書）

奉寄進 鹿島太神宮

常陸国真壁郡白井郷〈真壁安芸守跡^(秀幹)〉，
右，為天下安全武運長久，所寄付之状如件，

応永卅一年十月十日

從三位源朝臣御 □^{(足利持氏) (判)}

18 上杉憲実奉書案（鹿島神宮文書）

常陸国真壁郡白井郷〈真壁安芸守跡^(秀幹)〉事，早守御寄進状之旨，築波越後守相共莅彼
所，可被沙汰付下地於鹿島太神宮雜掌之状，依仰執達如件，

応永卅一年十月十日 藤原判

小幡左近将監殿^(泰国)

19 上杉憲実奉書案（鹿島神宮文書）

常陸国真壁郡白井郷〈真壁安芸守跡^(秀幹)〉事，早守御寄進状之旨，小幡左近将監相共莅^(泰国)彼所，可被沙汰付下地於鹿島太神宮雜掌之状，依仰執達如件，

応永卅一年十月十日 藤原判

築波越後守殿^(筑)

参考25 小幡泰国打渡状案（埴文書）

鹿島御神領常陸国真壁郡白井郷〈真壁安芸守跡^(秀幹)〉事，任去年十月十日御寄進状并御施行状等旨，築波越後守相共莅彼所，沙汰付下地於大禰宜憲親雜掌候訖，仍渡状如件，

応永卅二年二月五日 左近将監泰国在判^(小幡)

参考26 鳥名木国義申状（鳥名木文書）

「鳥名木右馬助状 応永卅三 七 廿六」^(端裏書)

目安

鳥名木右馬助国義謹申

右子細者，手賀出羽守号蒙仰鹿嶋御造宮奉行，国義知行分に申懸過分公事，剩致国義^(至)身上まで支配可仕由，伺申 上意之由，承及候間，驚存，以參上所申上也，所詮於公事者，任先例致其沙汰，於国義者，一度御屋形奉公申上者，以御成敗被退口出羽^(上杉憲実)守方之禱，向後弥為抽忠節，粗言上如件，

応永卅二年七月 日

参考27 島田泰規・長尾芳伝連署奉書（浄光明寺文書）

浄光明寺雜掌申，寺領伊豆国三津庄内四ヶ村事，三島宮末社八幡宮，可運送材木人夫及触云々，於当寺領者，去廿七年十二月廿一日被成諸公事御免御判上者，向後可被停止催促之由候也，仍執達如件，

応永卅二年九月廿六日 治部丞^(島田泰規)（花押）

沙弥^(長尾忠政)（花押）

寺尾四郎左衛門尉殿^(審明)

参考28 左衛門尉某・長尾芳伝連署奉書（正木文書）

上野国丹生郷事，被去渡岩松伊予守訖^(満長)，不日可致沙汰付下地於彼代之由候也，仍執達如件，

応永卅二年十二月廿六日 左衛門尉（花押）

^(長尾忠政)
沙弥（花押）

^(憲明)
長尾能登守殿

20 上杉憲実書状（明王院文書）

五大堂稻荷社長日祈祷歳末卷数一枝給候了，悦入候，恐々謹言，

十二月廿七日 憲実（花押3）

^(裏書・異筆)
「応永卅二」

当寺供僧御中

参考29 興津家定寄進状（浄光寺文書）

下総国葛西庄上木毛河郷内薬師堂別当職・同寺領等事，家定知行内之間，進置候上者，曾不可有異変相違之儀，何様御屋形御判送可^(有)申沙汰候，於御祈祷等者，不可有懈怠候也，仍寄進申状如件，

応永卅三年正月十一日 ^(興津)藤原家定（花押）

相承院

参考30 長尾憲明奉書（内閣文庫本正木文書）

上野国丹生郷事，任当郷冬十二月廿六日御奉書之旨，莅彼所，可被沙汰下地於伊予守代由候也，仍執達如件，^(岩松満長)

応永卅三年正月廿六日 ^(長尾憲明)前能登守（花押）

高津帶刀左衛門尉殿

21 上杉憲実補任状（相承院文書）

補任

下総国葛西御厨上木毛河郷内薬師堂號浄光寺別当職〈并寺／領等〉事，右，任奥津右衛門五郎家定申請之旨，所補任之状如件，

応永卅三年六月十三日 安房守（花押3）

相承院法印御房

22 足利義持袖判下文（上杉文書）

（足利義持）
（花押）

丹波国漢部郷并八田郷上村事，止料所之儀，所返付上杉安房守憲実也，如元可全領知狀如件，

応永卅三年七月十四日

参考31 細川満元遵行狀（上杉文書）

丹波国何鹿郡内漢部郷并八田郷内上村事，早任今月十六日御施行之旨，可沙汰付上杉安房守憲実代之狀如件，

応永卅三年七月廿日 （細川満元）
（花押）

香西豊前守殿

23 足利持氏御教書写（鎬矢記）

二所太神宮雜掌權祢宜定庭申，下総国葛西御厨領家職上分米事，為嚴重神領有其沙汰之处，数年令懈怠云云，神慮尤難測，所詮任往古例致催促，可全神稅之旨，可被下知代官之狀如件，

応永卅三年九月十八日 御判

（足利）
「持氏將軍」

安房守殿

24 上杉憲实施行狀（法華堂文書）

右大將家法華堂供僧職老口（良範律師跡），寺領相模国三浦郡林郷大多和村内田参町・梶町式段・在家参字等事，相承院法印依申請之，任去九日御下文之旨，可被沙汰付下地於淡路律師良助之由，可被下知代官之狀，依仰執達如件，

応永卅三年十二月十四日 安房守（花押2）

（一色持家）
刑部少輔殿

参考32 左近將監某・修理亮某連署奉書（実相院及東寺宝菩提院文書）

法華堂領伊豆国宇加賀・下田兩郷事，任去六日御判・御施行旨，莅彼所，可被沙汰付下地於地藏院雜掌之由候也，仍執達如件，

応永卅三年十二月廿七日 左近将監（花押）

修理亮（花押）

寺尾四郎^{（憲明）}左衛門尉殿

25 上杉憲実書状（実相院及東寺宝菩提院文書）

法華堂領事，無相違候，目出存候，仍五明一箱給候，畏入候，以此旨可有御披露候，恐々謹言，

応永卅四

卯月五日 安房守憲実（花押）

謹上 清浄光院法印御房

参考33 島田泰規・修理亮某連署奉書（東福寺文書）

^{（封紙上書）}
「大石遠江入道殿 治部丞泰規」

東福寺雜掌申，武蔵国多西郡船木田庄領家年貢事，寺家知行無相違之處，領主等難渋之間，去年〈応永卅三／十一 二〉重自京都被成下御教書訖，案文壺通封裏遣之，爰平山參河入道・梶原美作守・南一揆輩令抑留年貢之間，有名無実云々，太不可然，所詮守御教書，云未進^{（分）}□，云当年貢，嚴蜜可致其弃之旨，各相触之，可被沙汰渡寺家雜掌之由候也，仍執達如件，

応永卅四年五月十三日 ^{（島田泰規）} 治部丞（花押）

修理亮（花押）

^{（道守）}
大石遠江入道殿

参考34 大石道守書状写（三島明神社文書）

[]致向之由，[]到来候，急[]急速御一揆[]御立候，殊致[]目出候，然者就[]承候，其段可[]早々御左[]，恐々謹言，

[^{（年未詳）}] ^{（大石）} 沙弥道守（花押）

[]殿

*前号の大石道守に懸けてここに収録する。

26 上杉憲実書状写（烟田文書）

^{（鹿）}
□島烟田遠江守幹胤申，常陸国本知行分事，急□可有申沙汰候也，謹言，

(年未詳) (上杉)
十月廿五日 憲実
(泰規)
島田治部丞殿

*本文書以下二点、前々号の島田泰規に懸けてここに収録する。

参考35 島田泰規書状写(烟田文書)

常州御訴訟事、可致披露候之处、兎角罷過候、定可被等閑思食候哉、年内伺申候て、可進召符候、返々御当参内不申候、無御心元候、臆々可申沙汰候、恐々謹言、

(年未詳) (島田)
十二月廿日 泰規(花押)
(幹胤)
烟田遠江守殿へ

参考36 長尾芳伝書状写(烟田文書)

就今度烟田遠江守方鳥巢・富田之事、被罷上候、委細承無是非候、已前之時儀お不存候而、先日進状候、自然之事候者、可被加御扶持候哉、每事期後信候、恐々謹言、

(年未詳) (長尾忠政)
九月十五日 沙弥芳伝判
(憲秀)
謹上 土岐美作守殿

*本文書以下二点、前号の烟田幹胤に懸けてここに収録する。

参考37 土岐憲秀書状写(烟田文書)

田谷・保立兩人之事、已被下御書候上者、先被退在所、追而御訴訟可然之由存候間、いかにも御教訓可然之趣、已前進状之处、御返事今日八日到来候、凡彼面々被申候段、無是非候へとも、尚々可有御教訓候哉、身之事、当病候之間、昨日代官兩人罷越候き、定可申入候哉、恐々謹言、

(年未詳) (土岐)
十一月八日 前美作守憲秀(花押)
(幹胤)
謹上 烟田殿

27 上杉憲実施行状写(鎬矢記)

二所太神宮雜掌権祢宜定庭申、下総国葛西御厨領家職上分米事、早守去年九月十八日御判、可致其沙汰之旨、可相触領主等状、依仰執達如件、

応永卅四年六月一日 安房守御判
(憲重)
大石隼人佐殿

「表書ニ大石隼人佐殿 安房守憲実トアリ」

28 細川持元書状写(足利將軍御内書并奉書留)

御馬一疋(栗毛,印雀)馬下給候,畏入候,御太刀一腰行貞・御鎧一両白糸進上仕候,以此旨可有御披露候,恐惶,

(応永三十四年)
六月九日

(細川持元)
右馬助

進上 上杉安房守殿

参考38 長尾芳伝禁制(金沢文庫文書)

禁制

金沢称名寺造宮関所事

右,甲乙人等不可有濫妨狼藉,若有違犯之輩者,可有其科,仍執達如件,

応永卅四年十二月廿六日 沙弥^(長尾忠政) (花押)

29 上杉憲実書下(黄梅院文書)

武蔵国六浦郷瀬崎勝福寺門前諸公事以下,任先規,所令免許之状如件,

応永卅五年三月十二日 安房守(花押3)

当寺長老

30 細川持元書状写(足利將軍御内書并奉書留)

御書謹以拝見仕候,抑此事誠驚存候,仰之趣則到 上聞候,以此旨可有御披露候,恐惶,

(応永三十五年)
後三月十二日

(細川持元)
右

進上 上杉安房守殿

○上杉憲忠文書集補遺

37 細川持之力書状写(足利將軍御内書并奉書留)

就任職事御音信,承悦候,抑太刀一腰・馬一疋・鵝眼万疋送給候,祝着之至候,仍太刀一腰・腹卷一領令進候,表祝言計候,事々恐々,

(文安四年)
十二月廿七日

(細川持之力)
右

謹上 上杉殿

参考23 上杉長棟条目写（榊原家所藏文書）

一，三註四書六經列莊老史記文選外，於学校不可講之段，為旧規之上者，今更不及禁之，自今以後於腋談義等モ停止之訖，但於叢林有名大尊宿在庄者，除之訖，禪録詩註文集以下之学幸有都鄙之叢林，又教乘者有教院，於庄内自儒学外偏禁之者也，猶々先段所載書籍之外，縱雖為三四輩，相招於開講席，在所者自学校堅可有禁制，猶以不能承引者，可被訴公方，

一，在庄不律之僧侶事，至于令許容族者，於土民者永可令追，於諸士者以許容在所可被闕所者也，但至改禪衣者不及制之，

一，平生疎行而無処置身僧侶，号為学文雖庄内江令下向，自元依無其志，動不勤学業徒，遊山翫水輩每々有之歟，以彼素飡僧侶至令許容者，罪過与前段同，

文安三年（丙寅）六月晦日 积長棟